
彼女と友達になるまでのあれこれ。

TOKIA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女と友達になるまでのあれこれ。

【Z-コード】

Z9217Z

【作者名】

TOKIA

【あらすじ】

バイト中、たまたま後輩と会った。その後色々あって「夜道は危ないから」とかのたまうそいつを家まで送る事になって……。

(前書き)

ジャンルは恋愛としてありますがあなたの恋愛色は強くないかな、と思います。

「な……何で青海先輩がこんなとこ……」

月島はカウンターに商品を置いた状態のまま硬直した。

「なんでと言われても。、俺、ここでバイトしてるから。ほら、これエプロン、名札、制服」

「この子、何をそんなに驚いてんの？　俺が本屋でバイトしてたらそんなに意外？」

「うう見えても勤続一年は経つんだけど。

「最悪や……」

「人の顔見て最悪とか酷いね、おまえ」

頭を抱える月島。めっちゃ拳動不審。

「あつ」

俺が不思議に思つてゐると、我に返つた月島がカウンターに置いていたそれを凄い速度で後ろに引っ込んだ。

いや、今更隠しても遅いから。

見えた表紙は今日発売されたライトノベル。最近アニメ化だのゲーム化だと何かと話題の作品でうちの店でもポスターとかPVとか販促物を使って、フェイスをたっぷり使って平積み展開している。俺自身は読んだ事ないけど、そういうのに詳しい友人がいて、やたら勧めてくるからそのうち読んでみようかと思つてたんだけど。

「それ、買つの？」

「え？ な、なにが」

「だから、それ。『騎士王物語』の新刊」

「あ、あしあのつへ。青海先輩が何いつてるか私にこまよつわからせん」

澄まし顔なのに、すんごいあからさまに田を逸らされた。そのまま俺から離れるように後退つてこぐ。

「うそ、まあ……どいつもいにんだけど他に並んでゐる客をともいるから後ろ向きに歩くのはやめてくれな？」

「……そんなん言つて私が何持つてるか見る気やん」

「いやいや、見ないつて」

見なくとも分かつてゐる。生憎とやゝまで暇じやなし興味もない。仕事中なんだよね、どまちは。

「何をそんなに隠したいのか知らないけど、レジ前でウロウロされたら邪魔だから何も買わないならどうしね」

言つてゐる内容はさておこて営業スマイルは忘れずに。

「……言われんでも退きます」

一瞬ムッとした様子だつたけど円島は素直に退いてくれた。実際邪魔だと思つたんだわつ。

次の接客に移つてみると、円島が少し離れたところでもまたウロウロを迷つてゐるのが視界の端に映つた。

要するにあれか。件のライトイノベルが欲しいけど、買つのを誰かに見られるのが嫌、と。

俺にはよくわからない感覚だけど、なかなか難儀だな。月島つてあんな子だつたんだ。

まだ会つて間もないしイメージもくそもないけど。

###

月島漣は同じ学校の後輩だ。

彼女がうちに編入してきたのが一月程前。その後ちょっとした縁があつて校内で会えば挨拶や軽い会話くらいは交わす間柄になつた。縁つていうか月島と俺の妹が同じクラスの友達つてだけだけど。ただ、まあ兄としても、かなり妙な性格の持ち主であると言わざるを得ない妹は、必然と言うべきか友達が少ない。皆無だ。少なくとも俺は今の学園に入つてからあいつのリアル友人の話は聞いた事がない。重度のネットジャンキーでその分、ネット内での知人友人その他交遊関係は広いらしこけど、そんなもんは何の自慢にもならない。

ともあれ、そんな残念シスターに友達が出来たと聞いたならば、その友達とやらと接触してみたくなるのが兄の性だろつ。

ちなみに注釈しておくけど俺は妹と仲が悪い。ましてやシスコンでは断じてない。顔を合わせば毒を吐き合つ仲だ。

そんな訳で、単なる興味本意と怖いもの見たさから第一次接近遭遇（月島がうちに遊びに来た時にお茶を持つていつただけ。妹には侮蔑の視線を向けられた）を果たした俺は月島と『知り合い』と呼べる関係になつたのだった。友達ではない。まだ距離感を図りかねて、探し合いのよつややりとりが多い。

何度か話した印象や情報を俺なりに分析すると　月島は、よく言えば冷静で落ち着いている。悪く言えば冷たくて無関心で無感動。クールというか斜に構えていて、やや警戒心が強い。要するに思春期特有の病気。

話しつければ答えるが必要以上の事は言わない。無口という程でもないけど。誰に対しても一線引いていて、友人未満の相手にはその傾向が顕著になる。

これは当たり前と言えば当たり前だけど、誰とでもすぐに仲良くなつて人の懐に入つていけるような人種もいるから、そう考えると月島は付き合い辛い部類に入るんだろう。

と、思つてたんだけど。

###

その後も普段通り仕事をこなす俺の行動を気にしているのがバレな動きで月島は一向に出ていく気配を見せず、客足が止まり同

僚が先に帰つてカウンターに店員が俺一人になつても月島はまだ店内をウロウロしていた。

店内に腰を降ろせる場所はないから月島は向こう数時間立ちっぱなしだ。さすがにイラついた様子の彼女に俺はカウンターから声をかけた。

「あのや。 一つ言つとくと、俺、今日ラストまでのシフトだから俺が帰るの待つてるんだとしたら無駄だから」

「人が気付いとる事を今頃になつてわざわざ言つとか、どついう神経しとるんですか……。もう蛍の光流れとるやん……」

「何も買わずに夕方から今の今まで居座るのも結構どうかしてると思つ。営業妨害してる訳じやないから放置してたけど正直引いた」

「……まるで呼吸でもするように、さらつと酷い事言いますね。性格悪いってよう言われません?」

「言われる。自分でそつだな、と思わなくもない」

「そこは否定しきましょ」

「否定しても事実は変わんないし。つていうか、人に性格悪いとか平氣で言つヤツも大概性格悪いんじやないかと俺は思つ」

「んな……つ」

軽く反論してみると月島は顔を真つ赤にして言葉を詰まらせた。
あー、やばい。今日、初めて気付いたけど、この子思つてたより相当面白いつぽい。リアクションが俺好み。愉快つて意味で。こういつ弄り甲斐のあるヤツは大好きだ。

「まあ、月島の性格の良し悪しはどうでもいいけどな

「どうでもええんやつたら、その事でいちいち人を攻撃せんといてください……」

「攻撃なんかしてない。思つた事を言つただけだから」

「つて、おい」

円島は女子にあるまじき渋い顔でツッコミを入れた。お互いに遠慮がなくなってきたのはいいのか悪いのか。

「先輩、実はめっちゃ腹黒いですね」

「そり? 相手によつて自分を使い分けてるだけだけど。やつての事は円島と変わんないんじゃない」

「.....」

睨まれたジーツ田の中には渋味に苦味と探るような色が混じつてた。

「まあ、それはいいや」

「先輩、腹黒くてズケズケ物語つべせにあつせつ引くから、レッカはめつちやモヤモヤする」

「そんなこと知るか」

「ほんまに最悪や、この人、.....」

「もう最悪で結構。それより、いい加減買うのか買わないのかはつきりして欲しいんだけど。買うなら、さつさとして。買わないなら、お帰りはあちり。早くレジ閉めちやいたいんだよ」

「ぬうう」

唸りそれでも困る。

「円島のせいで俺の就業時間が刻一刻と増えているの分かってる?」

「店員のくせになんて事言つんですか」

「だつて、もう閉店時間過ぎてるし。他に誰もいないし。残業代とか出ないし」

労働基準法は守らないと色々言われるんだよ。
虫の光もいつの間にか終わっていた。

「わ、分かりました……買いますよ。買えればえんでしょう
「だつたら最初から買えよ、もつ。めんじくせいな」
「もつ、この店一度と来ません」
「別にいいけど、この辺他に本屋ないぞ」
「……せいやつた。あかん、もう嫌や」

月島がカウンターに突っ伏して頃垂れてる間にレジを操作する。
ピッ、とスキヤナが音を立てた。

「1,151円で609円になります」

「あ、はい」

財布から札が一枚出てきて渡される。

「万札とか……もつ、ホントめんじくせい……」
「……ええから、早よして下さい」

そろそろスルーする事を覚えたらしい。

乗つてこないもんは仕方ないので普通に仕事をする。

「あ、会員カード持つてる?」
「持つてないです。今日初めて来たんで」
「今作るか? うちのカード結構ポイント特典あるけど」
「でも時間掛かるでしきう? 今度ええです」
「五分もあれば出来るから作つとけつて。今回の分もポイント入る
から」
「え、でも……」

「もう、ここまできたら五分や十分遅くなつても変わんないし俺の事は気にしなくていいよ」

それよりはお得意様を増やしたい。基本的には職務に忠実なんだよ、俺。

「そり、ですか？」

「うん」

「……じゃあ」

「おつけ。じゃあこれに名前と住所と電話番号書いて」

新規会員、ゲットだぜ！

###

閉店作業を終わらせた後、事務所で残業して居る店長に挨拶をして店を出ると、普段より四十分程遅い時間になつていた。

「お疲れ様です、先輩」

「あ？ 月島？ 何やつてんの？」

「夜道を女一人で帰るのは危ないんで先輩に送つてもりおつかと思つて待つてました」

「えー、やだよ。別に一人で帰れるだろ」

「……ある意味、期待を裏切らへん返答をどういざやこ

ます

「じゃあいいじゃん。お疲れー」

「で、ほんまに帰りうとするし」

「そりゃ帰るよ。仕事終わつたし、明日も学校だし」

わざわざと帰つて、飯食つて、風呂入つて、寝る。何人たりとも邪魔はさせない。

「だから帰らんといふトセー」

力バンを掴まれた。振り払うのは簡単だけど、それはなんとなく躊躇われた。俺だつて何も血も涙もない冷血漢つて訳じやない。渋々月島の方に向き直つた。

「はあ……家、どつちよ?」

「送つてくれるんですか?」

「方向と距離次第によつてはちがくではない」

「……遠かつたら放つて帰る気ですね」

「そりゃそつだろ。俺が無駄な時間と労力を使っておまえを送り届けてやる義理はどこにもない。今だつて猛烈に帰りたい」

「言つてる事はその通りやと思ひますけど、それはさすがにどうなんでしょう?……」

「特に問題ないと思つけど」

「意地でも送つてもらいいたくなつてきました」「だから家どつちだつて聞いてんでしょーが」

近場なら送つてやるつてんのにわかんなこやつだな。

「あつちの方向に歩いて十分くらこです」

あつち、と言つて円島が指したのは俺の家がある方向だった。なんだ、近いじやん。

「幸運だつたな。それなら送つてやるつ
「なんでそんな偉そうなんですか
「これが俺の素なの
「先輩の素は鬼みたいですね
「何? やつぱり送るのやめようか?」
「いえ、すいません口が滑りました
「……ま、いいけど。わざわざ行くぞ
「あ、待つて下さい」

不満そうな円島に構わず歩き出す。と、すぐに後ろから足音が聞こえて、間もなくそれは隣に並んだ。

「先輩。」一ヒー飲みませんか。奢りますよ」

自販機の前を通りがかった時、円島がそんなことを言つ出した。

「いらっしゃい
「……少しは後輩の厚意を汲んでやうとか思わへんのですか
「あんまり。つか何急に。気持ち悪い
「ちょっと……言うに事欠いて気持ち悪いって

「いや、だつてなあ」

たかが缶コーヒー一本でも月島に奢つてもううよつた理由が思いつかないし。理由もないのに奢つてもらうなんて、それこそ気持ち悪いだろ。タダより高いもんはないんだよ。

「何か裏とかありそ「うじやん」

「そんなんないですよ。先輩じゃないですか私には人に意味もなく奢つたりするような趣味はないですし、かといって策謀を張り巡らす趣味もないです。ただ今日は先輩に良くしてもらつたんで、そのお礼です」

「俺が何かしたっけ」

「特別な事は何もありませんでしたけど。今日は色々と話す機会もあつたんで、お近付きの印といつかなんといつか」

「ふーん。まあ、そこまで言つない」

「ありがとう」ゼこます……つて、何で私がお礼言つてるんや……」

「これ、おまえの俺に対するお礼なんだろ? 別におかしくないと思つけど」

「そらそつなんんですけど……何か釈然とせえへん」

何かむにむに言いながらコーヒーを一本買つて月島が戻つてきた。
俺のはブラックで、月島のはカフェオレだった。

「そういや、ちょっと気になつてたことがあるんだけど
「何ですか?」

フルタブを開けながら訊ねる。

「今日おまえ店で何か拳動不審だつたじやん。あれってなんなの?」

「……確かに自分でも怪しかつたと思いますけど、そんなストレー

トに言わんとして下さるよ」

「それ以外に言いようがない。万引き犯でももう少しつと壁々してる」

「私、そんなに挙動不審やつたんや……」

がつくりと肩を落として円島は落ち込んだ。まあ、あの状態を思い返せば血口嫌悪に陥つても不思議じやないとは思つ。

「あの本買うの、そんなに人に見られたくなかったのか」

「……やっぱり分かりますか？」

「他に理由があるなら逆に教えてほしいうらこだけど」

「ですよね」

はあ、と諦めた様に溜息をついて苦笑する。じつこう顔も初めて見る。円島は、昨日まで というか今日会つまで持つていた印象よりもずっと表情豊かだ。やっぱり人間ちゃんと話してみないと分からぬことは結構多いよな。

「何か事情でもあんの？」

「いえ、そこまで重かつたり深かつたりする様な話はないんですけど」

「ふーん、まあ、どっちでもいいんだけど」

「え。これ、このまま話聞いてもらう流れとちやうんですか」

「なんだよ。話したいのか話したくないのか、どっちだよ」

「ここまできた話さんと逆に気持ち悪いです。それに毒を食らわば皿までとも言います」

「ちょ、俺、毒？」

「薬か毒かやつたら絶対毒ですよ、先輩は」

絶対と来ましたか……。別にいいけどさ。別にさ。でも俺だつて

何言わても気にしないわけじゃないんだぜ。

そんな訳で公園でベンチに座つて話を聞く事になった。どうでもいいけど、何かベタなシチュエーションだ。

「先輩も知つての通り私、先月転校してきたんですけど」「うん」

「前の学校でちょっと色々あります」

「つて言われても、色々って何？」

「そこ、あんまり突つ込まれたくないからボカしとのに遠慮もへつたくろもないですね……」

「分かつて聞いてるんだよ」

「で?」「で?」

先を促すと、言ごとにくそくしながらも、ゆっくりと続ける。「今まで見て月島もあんまり隠す氣もなかつたんだろ?」

「ライトノベルとかアニメとかつて、ちょっとオタクみたいなイメージあるでしょう」

「え? そうか? 別に普通だろ」

「私の周りの人気が皆先輩みたいな反応やつたら楽やつたんですけどまあ、前の学校で仲良かつた子がそういうのあかん子でして」「あー……いるな、そういうヤツ。もうなんとなく展開が読めた」

いつだつたか聞いた話によると月島が前に行つてた学校つて有名女子大の付属校でガチガチの進学校だつたらしいから、確かにそういう媒体に免疫のない人間が多そつだ。

「はい。後はもうお察しの通りやと思います。あ、でも別にそれが原因で引越ししたんとちやこますよ」

「なるほど」

「その時に私も上手く話を合わせといたらよかつたんですけど、自分的好きな本を悪く言われてつい熱くなつて」

「おまえ、結構バカだな」

「……言わんといつください。後悔しとるんですから」

要するにオタクを毛嫌いしてゐる友達に趣味がバレて、その後絶交まではいかなくとも気まずくなつちゃつて……みたいな事があつた訳か。その事をずっと気にしてて、だから、じつちに来てからはそういう趣味が知り合いに見つからないよつとしてた、と。で、今回、俺に即行バレてるんだから迂闊にも程があるけど。そもそも隠すようなもんでもないし。

「どんな話かと思つたらすげーしょーもないなー」

「またばっさり……そんなん分かつてますよ。じょつもない事を私が引きずつとるだけです」

「で、この話のオチは？」

「何を期待しとるんですか。別にこれ面白い話ぢやつし」

「ええ？ 関西人のくせに」

「関西人やからつてひとつへべつたせんといつて下わこ。いい迷惑です

何か嫌な思い出でもあるのか本氣で迷惑そつにして、月島は話を切る。

「とにかく、黄、そういう事があつたんですね」

「まあ、一応話は理解した」

「そんなに気にする様な事とちやうのは自分でも分かつとるんですけど」

「うん。何をそこまで気にしてるのかさっぱり分からん」

「……いや、でも、そこまではつきり言われるのも微妙です」

「俺はもうこういう人間だから諦めて。改める気もないし」

「それは改めた方が……と言つても無理なんやうひうけど」

よくわかつてこらつしゃる。田島には今日一日で俺の人となりが完全に露見したと言つていい。全く問題なわけです。その方が楽だし。

「何でおまえがあの妹と仲良くなれたのかは分かつた気がする。あいつもかなり変わつてるからな」

「あの子は確かに変わつてますけど、その言ひ方やと私まで変わり者みたいやないですか」

「いや、おまえ相当変なヤツだぞ。自覚ないのかもしんないけど」

「……そんなん初めて言されました」

「あいつとは仲良くなるべくしてなつたんだろうよ。個人的には面白くて仕方ない」

「言つときますけど、今先輩めつちや酷い事言つてますからね。て

「どうか、先輩もよっぽど変やから」「俺はいいんだよ」

俺は自覚あるし。その事で別に困つてもいないし。周りにもつと変なヤツ沢山いるし。それこそ『こいつ、頭おかしいんじやねえの』ってたまに思うくらいのヤツが。妹とか。

「誰に迷惑かける訳でもなし、それも含めて個性だろ。人間、自

然体が一番だよ」

「上手い事言つてまとめましたね。自分の事、堂々と棚上げして」

「だつて、そういうもんじゃない?」

「そうかもしだせんけど」

「だから、まあ、つまり色々と気にしそぎるなよつて事で」

「ん?もしかして今、励ましてくれました?」

「聞くなよ。思つてもやつこつことばさ。

俺は黙殺する。円島は驚いたように田を丸くして、次に小さく微笑んだ。

「意外でした」

「何が」

「先輩にそういう優しさがあつた事が、です」

「おまえは俺を一体なんだと思ってんのかな?」

「『口も性格も悪い、友達のお兄さん』」

そのまんまじやん.....当たつてるだけに反論出来ないけど。

「でも『口も性格も悪いけど、時々ちょっとだけ優しい、面白い先輩』に格上げしちゃいます」

「それは喜んだらいいのか? 怒つたらいいのか? ビツカ?」

「喜んだって下さ?」

「なんか素直に喜べん」

褒められた気が全然しない。

「そんなん先輩がひねどるからですよ。そういうのが性格悪いって言つとるんです」

「おまえも、そういうの」と言つから素直に喜べないんだつて分かれ

「う……」

月島は痛いと「」を突かれた様にたじろぐ。

「そう、ですね、確かに……」

「いや、別に責めるわけじゃないからな？ あんまり気にされて
も困る」

「……はい、すいません」

「謝るなって。まあ、お互い様って事で」

そう言つて、飲み干した「コーヒー」の缶をくすか「」に向かつて放り
投げた。

「ちっ、外した」

「行儀悪いなあ。ちゃんとほかしてきて下さいね」

「は？ ほかしてって何？」

「関西の方言で『捨てる』って事です」

「へー。そういう意味なんだ」

ベンチから立つて、缶を捨て直す。

「これでいいだろ」

「はい」

月島も俺に続いて立ち上がり自分で自分の分の空き缶を捨てた。

「さて、ちゃんと帰るか？」「

「あ、はい。そうですね」

一人連れ立つて公園を出る。

円島と、夜空の下を歩いて帰った。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9217z/>

彼女と友達になるまでのあれこれ。

2011年12月28日21時50分発行